

---

# エデムとORTが行く平行世界 第2弾    ~ Rewrite 編 ~

注ぎグチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エデムとORTが行く平行世界 第2弾 〈Rewrite 編〉

### 【Nコード】

N6832V

### 【作者名】

注ぎグチ

### 【あらすじ】

この作品は、「エデムとORTが行く平行世界シリーズ」の第2弾です。

前作を読むことをお勧めします。ある日パチンコ屋に言った主人公はひょんなことからTYPE-MOONの世界に転生してしまう。その後なんやかんやあつてRewriteの世界へ！お供のORTと行くはちゃめちゃコメディです。主人公は最強オリ主チートです。

シリーズ第1弾はTYPE・MOON編ですが、第2弾はKey編  
にしていきたいと考えています。

幕間1メートル 「キャラ設定」

注ぎグチの本気（前書き）

注ぎグチの本気をどうぞ堪能ください。

## 幕間1メートル 「キャラ設定」 注ぎグチの本気

どうも、注ぎグチです。

「エデムとORTが行く平行世界 第1弾」お楽しみいただいているでしょうか？

ここまでを読んでいたいた方々に多大な感謝とお礼を申し上げます。

ありがとうございます。これからも誠心誠意込めまして執筆に励みたいと思います。

また、これからは注ぎグチの私生活の都合上、更新が遅れることもあると思います。それでも完走を目指して行きたいと思っていますので、応援よろしく願います。

また、ご希望の原作をシリーズ作品として執筆したいと思っています。

注ぎグチはできるだけ読者の皆様のニーズにお答えし、皆様との作品を作っていきたいと思っています。

注ぎグチは手遅れなオタクです。アニメ、漫画、小説、エロゲー、一般ゲーム、どのような原作が来ようと対応していきます。

ぜひとも皆さんの意見をお聞かせください。続編は多かった原作作品か、注ぎグチのノリで決めたいと思います。

選ばれなかった原作も続編または番外という形で取り上げていくことをお約束します。

現在のシリーズもので型月とKeyのRewriteを書いておきます。

たくさんのご意見・希望をお待ちしております。

さて、挨拶は此処までとして……

さてさて、そろそろキャラ設定の方を出さないと私の非才な文からは主人公たちの想像が難しいかと存じます。

そこで……んっなんと！

この私こと注ぎグチが本作の主人公「アド・エDEM」とヒロイン！？「ORT」さんの“イラスト！！”を本気を出して書いて参りました！！！！！！！！！！

ふふふつ 実は注ぎグチ・・・ある時は理系大学生・・・またある時は就職難民・・・またある時は「此ノ110」の作者・・・  
・その正体は！！・・・コミケにも参加している「イラストレーター」  
なのです！！

・・・

・・・あ、どうでもいいですよね（泣）

ご意見・感想もお待ちしております。

イラストについて一言くれるとうれしいです。

それではキャラクター紹介の方へどうぞ！

/

/

/

アド・エデム

> i 2 8 9 0 0 — 3 7 2 4 <

本作の主人公。髪は薄いピンク色をしている。瞳は青い。おっちゃんのおかげでイケメン。

身長176cm 体重65? 血液型不明。

趣味は睡眠、パチンコ。好きなものは博打、幼女、睡眠。嫌いなものはキノコ、生魚。

将来の夢はハーレム!「エデム?「ヒツ!?お落ち着けオルト!これは!」問答無用・バギゴギガギゴ「ギヤア~~~~!」

性格はのんびり屋。基本は平穩を目指して行動している。時たま邪気眼が発動する。眼帯など。後はロリコン疑惑がある。

身体能力は核弾頭並み。Fateのサーヴァントが戦闘機と例えられている。戦闘機は給油などが必要だけど、核弾頭は発射されればどうしようもない。

現在、「ORT」と「魔剣・斬撃皇帝」と一体化しています。自らが剣であるため「虚刀流でもはじめるか・」っと思っている今日この頃。

根源としてあるのは「世界の樹形図」。それが能力にも影響を与えている。

イラストのモデルは「IS インフィニット・ストラトス ラウラ」です。

・能力・スキル

筋力 EX

魔力

耐久 EX

幸運

敏捷 EX

宝具 EX

### 「魔剣・斬撃皇帝」

対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣。その本質はあらゆる可能性を内包した樹形図より対象を確実に斬り裂く因子を要素となる因子を持つてくること。

現在は体そのものが魔剣であるため、好きな形態、で好きなように出せるが黒色がデフォ。

現在、猛練習の末にセイバー・オルタの黒いエクスカリバーを完璧に模倣することができ、通常開眼のデフォとなっている。

### 「肩の力を抜く程度の能力」

おっちゃんにもらった能力。どんな所でもリラックスする（させる）ことができる。その本質は樹形図より最適な事象を選択・書き換えること。

普段は睡眠のため意外使っていない。子供をあやすときとかに便利。

### 「ムツゴ ウ王国」

そのままの能力。自分以外の種族と心を通わせることができる。

### 「魔眼：侵食結界・水晶溪谷」

ORTが持っている能力。一体化したことにより使用可能になった。使用中は左目から炎結晶が噴き出してくるため、一応は魔眼という扱い。普段、眼帯をつけているのは「なんかカッコよくねえ？」とのこと。イラストにもその様子が描いてある。

## オルト

> i 2 8 9 0 1 — 3 7 2 4 <

本作のヒロイン。髪は黄緑と青のメッシュ。瞳は翡翠色。頑張っ  
て見て中学生くらいの幼いゲッフォンゲッフォン・・・少女。

身長 133 cm 体重 33 ? 3 サイズ 65 - 47 - 62 血液  
型不明

モデルとなったのキャラに体格が似ている。ただし、それよりも  
少しだけ身体的スペックが高いのが密かな自慢「なにか（笑）」・  
・・・いえ、ごめんなさい。

その正体は死徒二十七祖の五位。水星のアルティミット・ワンで  
あるが、5000年ほど先に地球に到着してしまったドジっ娘。  
全長40メートルほどの宇宙生物。外見は巨大な蜘蛛に酷似する。

単純に実力でいえば現在世界最強。地球で戦う限り弱点は無いと  
される。死の概念がないため直死の魔眼でも殺すことはできず、物  
理的に破壊するしかない。

地上のいかなる材質よりも硬く、柔らかで、気温差に耐え、鋭い  
という外皮に覆われている。

趣味はエデムといること。好きなものはエデム。嫌いなものはエ  
デム以外

将来の夢はお嫁さん！

性格はモデルのキャラに似ているがツン2デレ8くらいの割合。という感じ。最近人間に触れてきて感情を見せるようになってきた。というか口がうまくなってきた。エデムの財布を「あら？あなたのような甲斐性なしに財布なんて持たせられないでしょ？私がしっかり管理してあげる」と言っつて紐を握っている。ヤンデレ

エデムが「始めて会った頃のオルトは見た目通りの子供だったのに……」と育て方を間違えたと嘆いていた。

最近は料理を勉強しているが、あまり進歩していない。しかし、エデムのお嫁さん「べ、別にそ、そんな／＼／＼……ブツブツ」になるため花嫁修業中。

現在はアド・エデムと融合したため、斬撃皇帝とも融合したことになる。

そのため、アド・エデムの根源の投影といっても粗食ない関係になっている。

普段はエデムの影の中で過ごしている。

エデムの許可によりORTへの変身も可能。

イラストのモデルは「MELTY BLOOD 白レン」です。

・能力・スキル

筋力	E X
魔力	
耐久	E X
幸運	B
敏捷	E X
宝具	A +

「侵食結界・水晶溪谷」

侵食固有結界—（固有結界に似た能力）『水晶溪谷』を数千年にわたり展開しているという。水晶溪谷は彼女が存在するだけでそこを彼女の住んでいた環境に変化させるというものであり、要するに異界秩序による地球の物理法則の改竄である。炎がふてた所はたちまち結晶化する。この炎を炎結晶という。

幕間1メートル 「キャラ設定」

注ぎグチの本気（後書き）

どうでしたか？

注ぎグチの画力は？皆様のイメージとは違っていたかもしれません。  
今後も要望があるようなら、オルトちゃんの水着やサンタ姿など季節イベントごとによって行きたいと思います。

ご意見・感想お待ちしております。

## 001メートル やってまいりましたRewrite（前書き）

以前は「此ノ樹の110メートル」という作品の続編として書かせていただいておりますが、多数の世界を同じ作品に閉じ込めてしまふと原作を知らない人が嫌がってしまうつと友人から指摘を受け、このたびシリーズものとして分けさせていただくことになりました。前作からご愛読くださいました皆様には深くお詫び申し上げます。

それでは此ノ樹の110メートル改め・・・エデムとORTが行く平行世界シリーズ第2弾 Rewrite 編をお楽しみください。

## 001メートル やってまいりましたRewrite

世界を移動する。

樹形図を逆走し下へ下へと辿っていく。

脳裏に掠める星の記憶。

幾千幾万と繰り返されてきた生命の営み。

回って、回って、回り疲れて。

息苦しくなって、それでも世界は廻り続けた。

その結果世界は死に、生命が息絶える。

鋼の大地へと変わってしまった。

そんな世界の未来を救ってきた。

なら・・・・・・・・・・・・・・・・

次は・・・・・・・・・・・・・・・・

過去を・・・

・・・救うんだ。

そして俺たちは「根」へと落ちていく・・・

/

/

/

ブ  
ロ  
ロ  
ロ

バスに揺られながら窓の外に目を向ける。

そこには緑に囲まれた町。

町の中に緑がある町。

造られた緑の町。

緑化都市「風祭市」

「・・・やっと、ここまで来たか」

この世界・・・「Rewrite」に来て3年も経ってしまった。

あの鋼の世界に通じる可能性の大きい世界。

そこに俺とオルトは舞い降りた。

俺たちは世界各国を旅してきた。

ブラジルから始まりアルゼンチン、ボリビア、メキシコ、アメリカ、カナダ、船に乗り、イギリス、フランス、スペイン、南へ下り、アルジェリア、アラブ、スーダン、コンゴ、ザンビア、タンザニア、ケニア、エチオピア、サウジアラビア、イラン、カザフスタン、ロシア、中国。

世界が終わる予兆を探して・・・

そして今、日本へやってきた。

そしてこの世界が「Rewrite」だと気が付いたのは最近のこと。

ロシア旅行中に森で黒犬の魔物6匹が襲ってきたので1匹をグシャツと潰し、残りも潰そうと思ったときにガーディアン乱入。

そしてその人達と会話した結果、判明した。

「ここ、Rewriteじゃん……」

俺、まだ全部終わってねえし……。Terraltの最後の方だけ見てねえ。

最後に見たのは篝を匿うあたりまでだった。

正直今が原作のいつ何時なのかわからない。

その確認の意も込めて俺はロシアで書いてもらった紹介状をもって、ガーディアン日本風祭市司令部に入隊希望をきたわけです。

「この町はずいぶん綺麗ねえ。あ、見て見て！あそこにケーキ屋さんがある！」

今度、買ってやるから静かにしてなさい。

「はいはい。で？後どれくらい？」

「次で降りると書いてある」

オルトが俺の持っている地図とメモの書かれた紙を覗いてくる。

ORT改めオルトはこの3年間で、たくましく成長した。・・・内面だけ。

最初は本当に子供だったけど、俺の能力に影響されて環境に最適化していった。

その結果。

「ちょっと、なにアホ面してんの？あ、ネクタイ曲がってる。直してあげる」

「・・・あんがと」

「うーんと、こうして・・・こっちを下に・・・ギュッ・・・あれ？」

「げっ！・・・く・・・くび・・・首が」

タップタップ！決まっていますよ！オルトさん、首決めちゃっていますよ！

「い、ごめん！」

ご覧いただけただろうか。

すっかり世話焼き女房よろしくの女の子に育ちました。ありがとうございます。

正直、最近はドキッとさせられることが多くあります。仕草などが

どこか色っぽく感じられます。

この間なんか、「これであの人もメロメロ」悩殺編」とかいう本を読んでいた。ちなみにフランス語だったw

俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない

ほんと勘弁してください。

閑話休題

「危うくおっちゃんのところに行くところだった（汗）」

「・・・ごめん（シュンッ）」

とりあえず、頭を撫でておく。こつすると大抵元気になるところはまだまだ子供だ。

「次からは頼むよ」

「あ、うん！」

その笑顔につられて俺も自然と笑顔になる。

ヒソヒソ

外人さんかしら？

あらあら、微笑ましいわね

兄弟かしら？

違うんじゃない？

あらやだ！もしかいてロリコン？

バスの乗客の皆さんの視線を独占！イエーイ！！

・・・死にたい。

そんな平日の昼下がり、バスに揺られてガーディアン日本風祭り司令部へ向かった。

/

/

/

どうも皆さん。アド・エデム改め立花<sup>たちばな</sup> 七桜<sup>ななお</sup>です。

一応、この世界ではこの名前を名乗っています。苗字は生前の橘の字違いで名前はオルトが付けた。

理由を聞くと、「髪が山に咲く桜のようなだから……あと女顔（ボソツ）」と答えた。

そのオルトは現在俺の影の中でP Pをやってることだろう。

かくいう俺は何をしているかというところ……

「……………ぐ————ZZZ」

「おいっ立花！走りながら寝てんじゃねえ！」

「……んあ？……はいはい、おきてますよ」

「……嘘つけ！」「」「」

訓練所にいる40数名の訓練生や教官からツッコミが入る。

「西九条！この馬鹿を端っこに連れてけ！」

教官の清水が叫ぶ。

「は、はい！ほら、さっさと来なさい！」

「んあ？・・・ぐーーzzzz」

「起きろ！」

頭をひっぱたかれる。

「ん？・・・何だ西九条か・・・いつもすまんね」

「そう思つのなら真面目に訓練しなさい。私はあんたなんかに構ってられない。もっと上に行かなきゃいけないの・・・」

どうもこいつは焦ってるようだ。

「まあまあ、飴でも食うか？」

俺の「肩の力を抜く程度 of 能力」さんは常時発動なのです。

そんな俺を見てため息をつく。

「はあくあんた見てるとなんか馬鹿らしくなってくるわ・・・」

そついいながらも壁に寄りかかつて座る俺の隣に座る。

「悩み事なんてのは悩んでも解決しないのさ、バカやって放り出すのがオレ流。そうすると不思議と解決してるもんさね」

「ホント、お気楽でいいね、あんた」

ふふふつと笑みをこぼす西九条。ここに着てから四六時中居眠りし

ている俺の世話係りになっている少女。

「どうやら今は原作で言うTerrallートの序盤、過去編というやつらしい。」

今宮も瑚太郎も向こうで何か言い争っている。

そうこうしているうちに清水教官が集合をかける。

「さて・・・これからどうなることやら」

/

「それではこれより対魔物を想定した訓練を開始する」

「チームは5人一組だ。それぞれ順位ごとに分かれる」

俺のチームは今宮、西九条、長居、瑚太郎、俺のワーストチーム。ドベ5人。

え？なぜお前がそこにつて？めんどくさかったからに決まってるじゃんw

俺も瑚太郎と同じで最初は期待されていたらしい。

どうやらロシアで紹介状書いてくれたおっちゃんがなかなかすごい人だったらしい。そのおかげでロシアの新星と今宮にはやし立てられた。

まあ、力加減がめんどくさくて最強か雑魚の二択だったから雑魚選んだだけなのですが……

それに清水教官が好きにやれっていつてたし。

「だあゝ！またこのメンバーかよ！？」

今宮が絶叫している。

あまりのヒスつぶりに声をかける。

「はは、ドンマイw」

「おめえゝらのことだよ！おめえゝと天王寺のドベコンビだよ！」

「いやゝ照れますねコタさんや？」

「え、いや俺は別に……」

瑚太郎は今宮の物言いにうんざり気味らしい。

「ほめてねえーよ!」

「・・・ふー」

「・・・」

そのやり取りに西九条はため息、長居は無言で見ていた。

今回はビルに立てこもった獅子舞型の魔物を、チームで駆除するという筋書きだ。

冗談めいたノリに、皆気分をゆるめ、最初のチームがビルの中へ入っていく。

「まあ、今回は楽勝じゃね? 獅子舞ってハンデもらったようなもんだべ?」

今宮がいうこともわかる。それに対してほかのメンバーも気をゆるめてるようだ。

「・・・そうとは思えないけど」

「ほうほう。その心は?」

珍しく瑚太郎が発言する。そこにオレがすかさず合いの手を入れる。

「・・・いや」

しかし、それに答えない。そんな瑚太郎に皆がイラつく。

「あんたのそういうとこムカつく・・・」

「言いたいことがあるなら、言ってみたら？」

「言えよ。聞いてやるし。」

「・・・」

そういわれてやっと話し出す。

「あの獅子舞、教官たちの動きは制限されるだろうけど、その分、本気は度してくると思う。」

「どうしてそう思うの？」

「あのサイズの魔物って半端じゃない。虎の魔物がいたとしたら、そいつは実際の虎より強いよ・・・俺たちにそのことを指導しようとしてるんなら、ヤバイと思うよ。この訓練」

「確かに一理あるね」

西九条は顎に手を当てて考え始める。

「勇者様のご慧眼はさすがですねー。雑魚じゃなければ」

ガッシャン！

その時、ビルの窓ガラスが割れて誰かが落ちてきた。

今の訓練を受けている班のひとりだ。

入って3分も経っていない。

「痛そうだね・・・」

俺のその言葉にチームメイトは押し黙っているだけだった。

・

・

・

結果はいうまでもなく惨敗。全員が死亡判定。俺？おれは入って20秒で死亡w

/

/

/

基礎訓練課程、修了。

これで晴れて実践にいけるわけですね。

訓練生最後の日はささやかな宴が開かれた。

チームメンバーもおのおの楽しんでいるようだ。

今宮なんかは友人たちと騒いでいるようだ。

瑚太郎は江坂さんとなにやら話している。邪魔しちゃいけないな。

長居はガーディアンをやめてしまった。

西九条はと……

……なんかものすごい集られてる。どうやらナンパされているようだ。わかりやすい可愛さの西九条は声をかけまかれるようだ。

なんだか卒業式に先輩に告白する下級生みたいで笑えてくるw

ずっと見ていると目が合い「助けなさい！」と訴えかけてくるのを無視し続けていた。

「あ、あの立花さん！」

「んお？」

なんか声かけられた。確か……忘れた。卒業生Aしよう。

「なんだ卒業生A？」

「ぼ、僕と付き合ってください！」

……はい？

「はじめて見たときから好きでした！」

いやいや、意味わからん。男に告白されて何が面白い。

「まて！」

おお！名も知らぬ卒業生B助けてくれるのか！

「ずるいぞ！俺も立花さんが好きなんだ！」

えー

その後、「俺も俺も」と会場は大混乱。西九条派と立花派が一触即発。

・・・全員沈めといた。

全員正座させ、オレが男であることを説明してやって。ほとんどががっかりと肩を落としていたが、何人かが「はぁーはぁー」言っていたので壁に埋めといた。

西九条はそんな俺を見て爆笑していた。

・ ・ ・ ・ ・ ちくしょう。

つ・づ・け・る？

## 001メートル やってまいりましたRewrite（後書き）

これからもよろしく願いいたします。

## 002メートル さくつとやりますよ〜（前書き）

こんにちは注ぎグチでございます。

このたびはシリーズものになりましたので、ガンガン投稿させいただく所存でございます。

皆様とは長いお付き合いになることを心より望んでおります。

それでは、本編をどうぞ！

002メートル さくつとやりますよ〜

ブロロロ〜

江坂さんの車で瑚太郎と今宮、西九条と一緒に風祭市に送ってもらった。

「いや〜、すみません。俺まで送ってもらっちゃって」

「なに、気にするな。それでは三日後九時、本部に出頭するように」

江坂さんの車は俺と瑚太郎を駅前で降ろし今宮、西九条を乗せたまま走り去っていった。

「さてどうしようか？ コタさんは偽名なんだった？ 俺は田中太郎だったw」

「俺は風祭 凡人……」

「……大丈夫なのかな？」

「さあ？」

こんな偽名で大丈夫なのかな？ 一応書類上は問題なさそうだからいいか。

「んじゃ、また三日後にな立花」

そういつて瑚太郎は町並みに消えていった。

ふむつ、俺も寢床の準備しなくちゃいけないな。一応、支度金としてそれなりの額は渡されている。

「狭い部屋はいやよ?」

にゅつと影からオルトが出てくる。

おまつ、誰かに見られたら大変だろ?

「・・・っん」

ここ数年ずつとほとんど影の中に入れていたことに腹を立てているのだろう。

「影ん中に押し込めてたのは悪かったよ。でも、おまえはこの世界では魔物みたいなものだろ? 鍵と間違えられでもしたら大変だぞ?」

「ヤツちゃえばいいんじゃない?」

なんと物騒なこと言うんでしょうこの子・・・

「それはだめって、ゆゝたやんけ」

「・・・プイ!」

機嫌悪そうにそっぽ向いてしまう。

「・・・わかったわかった。今日1日言うこと聞くから許してくれ」

「・・・何でも？」

お、もう一息だな。ふっ、ちよろいものだ（ニヤ

「ああ、何でも言うこと聞いてやんよ」

「・・・じゃあ、手繋いで」

そういつて手を差し伸ばしてくる。その顔は薄く赤に染まっていた。

「はいはい。仰せのままに」

傳きながら差し出された手を握る。

「それとケーキが食べたい」

「んじゃ、まずはケーキ屋からだな」

そして俺たちも町並みの中に消えていく。

/

/

/

三日後、本部に顔を出す。

ガーディアンの目的である。「鍵」の破壊について説明された。

「鍵」とは敵対組織「ガイア」にとって救済と呼ばれているそうだが、その正体は現在の文明を滅ぼし、再び、新たな知性ある生命を誕生させるリセットボタンである。

ガーディアンは鍵を破壊し滅びを阻止することが目的だ。

超人的な能力を持ったガーディアン、魔物を使う魔物使いがいるガイア。この世界ではこの二つが争っている。片や人類を守る者達。片や世界の滅びを望む者達。

鍵自体には人類を滅ぼす意思はなく、生理現象のように地球上の生命を滅ぼすものだ。

むしろ、滅びを止めようとしている。

それは、星が新たな生命を生み出すほど力が無くなってきたからである。すでにターニングポイントは過ぎてしまった。そのため、たとえ人類を滅ぼしても星は再生しない。

滅びを止めるには、どうしたら「立花、大丈夫？ 顔色が悪いよ？」

西九条が俺に声をかける。

顔を上げると、今宮、瑚太郎、清水教官、江坂さんなどがこちらを見ていた。

今は、風祭で行われる「収穫祭」期間の持ち場の振り分け中だった。

「どうしたのお姫様？ あ、わかった！ あの日だ！ ムッペラー！」

とりあえずうるさい今宮は沈めておく。

「どうした気分でも悪いのか？ 顔が青いぞ」

江坂さんも心配してくれる。

「あはは、大丈夫です。朝食を食べ過ぎて気持ち悪いだけですから」

「それならいいが、無理はするなよ」

「ういゝっす」

/

それで俺らは割り振られた管轄でモニター……つまり監視要員としてきてるわけなんだけど……

「そついや、お前ら何がきんの？」

唐突に聞いてきた。

「俺は、止血が早かったり、持久力を上げたり……」

「汚染系は戦闘向きじゃねえーな」

瑚太郎が今宮と話している。

能力は3つの分野に分けることができる。

追跡や罠など狩りの本能を特化させた「狩猟系」、切断に特化した「伐採系」、特殊な物質などを体内外で生産する「汚染系」。

ちなみに、今宮も西九条も狩猟系である。

「立花は？」

とか西九条が聞いてくる。まあ、隠すこともないし……

「えーと、どんなものでも斬れます。」

つつても、斬撃皇帝は開眼できないんだけどね。

斬撃皇帝を開眼するにはジンが必要なのよ。ジンは機能をなくした

星にあふれだしたあらゆる有害。それがこの生きた星にはない。量子変換でもできるけど、デフォのエクスカリバー型を作るのに東京ドームくらいの面積の地面が無くなる。一応、変換したものを貯ておけるが、毎日ちよつとずつやつても割に合わない。

今現在で貯まっているのナイフ程度の大きさだ。

まあ、それだけあれば死徒の一体くらい切り裂けるけど。

ま、そんなの使うより、体そのものが魔剣なわけだから、手刀ですぱーっといけます。訓練所ではひたすら虚刀流の真似事してましたから（キリッ

その辺はそのうち何とかなると思う。アテがあるからな・・・

「伐採系だったのお前？ そんなとこ見たことないっしょ」

「いや、見せたことないもん・・・それと汚染系。周囲の侵食・・・わかりやすく言うと物質を結晶化させて水晶にしたり、それで作った槍とか飛ばして攻撃できる。有効範囲は目の届く範囲くらいかな？ それ以上は試したことないからわからん。たぶん狩猟系はないと思うけど・・・」

「「「・・・はあ？」「」」

なんか皆面白い顔してる。

「お、おま、レアな能力2種類持ち、通称ダブルホルダーだっていうのか!？」

「おう」

説明口調乙w

「お前、激レアじゃん！ 何で言わねえーのよ！？ え、何？ それじゃあお前、本当にロシアの期待の新星だったの？ こんな近くにのし上がるチャンスがいたのかー！？」

なんか今宮がうるせえー。

西九条と瑚太郎はいまだフリーズ中w

まずいのか？

「そりゃー、今まで落ちこぼれたと思っていたのが本当に期待の新星だったら・・・ねえ」

あ、オルトさんちーっす。

オルトとはテレパシー的なもので会話できる。

「・・・あー！」

「今度はなによ？」

「あと、テレパシー的なこともできる。これって狩猟系かな？」

「「「「・・・」」」」

フリーズ再びw

「エデム・・・あんたわかってやってるでしょ？」

わかる？w

「立花つてすごいやつだったんだな。最初は眼帯つけてるからただの痛い人かと思ってたよ」

コタさんや・・・そいつは言わない約束だぜ・・・

「ダブルでもレアなのに、トリプルって・・・」

おい、西九条かえって来い。

「いやまてよ。・・・こんな逸材がわざわざワーストチームに残ってくれていて、あまつさえ今は実践でチームを組んでいる・・・俺勝ち組じゃねえ？」

おい、全部聞こえてんぞ。

ガシッ！

急に今宮に肩を掴まれた。

「立花さん、これからは仲良くしようね（ニ）」

「・・・今宮キモッ」

おっと、本音がw

/

んで、持ち場に着いた。

森と町を結ぶ最短ルートの1つ。しかも比較的人通りも少ない。

ガイアの魔物使いや一般人が森へ行かないようにするのが俺たちの役目である。

その中でも優先度が低いポイントの1つがココであり、今宮はそれが不服らしい。

ん？なんか森のほう騒がしいな。

その時、森の奥から笛の音が響いた。超人的な聴力を持つ俺たちには聞き取れない波長。

「・・・緊急シグナルだな」

急いで、皆のところに行くとなにか揉めている所のようなのだ。

「何してんのさ君ら・・・」

「立花お前も行くつぜ。もう力を隠すこたあねえ！。上にのし上がろつぜ！ 先行くからな」

そう言って森のほうに駆けていく。

「西九条お前も命令違反か？」

瑚太郎が問いかける。

「・・・上に行かなきゃ、いつまでも息の詰まったままだから」

そういつて行ってしまった。

「立花はどうする？」

どうしたものか、正直に言つと原作知識もだいぶ霞がかかってしまっている。

死なれても目覚め悪いし・・・

「どうしたの？助けないの？」

そうだな・・・そうだよな・・・

「連れ戻してくる・・・瑚太郎はココにいてくれ」

そういい残して、俺は2人の後を追う。

俺の身体能力なら追いつける。

/

2人は森のずいぶん奥で見つけた。

どうやら、7匹の魔物と交戦中のようだ。

黒い犬。ハウンドタイプと言われる量産型の魔物だ。

その一匹が西九条の背後から襲いかかろうとしている。今宮は自分のことに精一杯で気づいてない。

「ちっ」

背後から襲い掛かる魔物に上から水晶の槍を投げ地面に縫い付け、地面に着地する。

「え？」

地面をなめるように駆け抜ける。

通り過ぎざまに西九条と今宮に群がる魔物の首を手刀で切り落とす。

「「立花！」」

2人が驚いている。

「説教は後だ。町まで撤退するぞ！」

最後に地面に縫い付けたやつを刎ね、森の外へ向かう。

「・・・お前めっちゃ強いじゃん。なんで隠してたんだよ？」

「隠してないよ。聞かれなかったし、見せろとも言われなかった」  
すると今宮が気まずそうに話しかけてきた。

「その・・・すまなかったな、今まで・・・」

それはきつと心からの声なのだろう。だから俺もそれに答えなくっちゃいけない。

「今宮キモッ！」

「何だよ！人が折角あやまってんのに！」

しまった。ついつい。

「いや〜ねえ？今まで通りでいいよ？じゃないとこっちが調子狂うし。」

「はあ〜。なんでこんなやつが強いんだか・・・」

む、こんなとはなんだ。こんなイケ面つかまえて。

「ま、戻ったら瑚太郎とも仲良くしろよ。これは命令だ」

「・・・わあーったよ。善処いたします」

よしよし。

「西九条もな。仲良くすんだぞ」

「・・・はあ。わかったわよ」

よし、そんじゃさつさと町に「エデム！」！？

「止まれ」

「どうしたの？」

「・・・囲まれた。数は30。どれもハウンドタイプだ」

「な、30！？30つつたか！？」

「ああ」

周りは完全に魔物に取り囲まれている。1人なら軽く跳んで逃げるか、懺滅だが・・・

先ほどの魔物のマスターが仲間を集めたか・・・

「う、嘘・・・こんなに」

「まじか・・・」

顔を真っ青にしている2人。

「仕方ない・・・」

オルト、力借りるぞ。

「はいはい、エデムは私がいないと駄目ね」

・・・最近家事全般を任してるから反論できねえ！

「お前ら伏せてろ」

/

＼西九条 side＼

「お前ら伏せてろ」

立花がそっいつて左目の眼帯を外した。

立花の右目は青い。しかし外された左目は緑・・・いや、翡翠色。しかも同じ色の炎まで出ている。

立花の足元から広がっていく。

その炎に触れたものはたちまち水晶になっていく。

でも、私と今宮には影響がないようだ。

あたり一面が水晶の世界と化す。

立花は翡翠の目であたりを見渡す。

その動作に魔物たちが一斉に襲い掛かってくる。

私は、不思議と怖くなかった・・・

いや、私は目が離せなかったただけだ。

そのきれいな左目に・・・

次の瞬間

魔物は地面から突き出した水晶の槍に串刺しにされていた。

/

＼今宮 side＼

ありえねえ。

30体もいた魔物が一瞬で串刺しにされていた。

俺たちでは7体を相手するのも無理なのに、1人で30体。

まだ、死に切れていないのか抜け出そうとしている。

しかし、立花はそんなのは気にしないであたりを見渡す。

そして、水晶の槍を作ると森の闇に向かって投げる。

遠くから断末魔が聞こえてきた。

すると、まだ生きていた魔物も塵となって消えていった。

俺たちは、ただただその光景を目に焼き付けるだけだった。

続きますよ。

002メートル さくつとやりますよ〜（後書き）

どうでしたか？

楽しんでいただけたら幸いです。

次回は主人公のまさかのカミングアウト！

ご意見・感想お待ちしております。

003メートル 自重しませんよw（前書き）

またまた、注ぎ口です。

皆さん、この夏をどうお過ごしですか？

私は、小説投稿で現実逃避の毎日・・・

さて！それでは本編をお楽しみください！

## 003メール 自重しませんよw

「ばか者！ 持ち場を離れるとは何事だ！」

今宮、西九条が頬を張られた。

清水教官はだいぶお冠のようだ。

あの様子では説教は長くなりそうだ。

「お前もだぞ立花。連れ戻すためとはいえ、持ち場を離れるのは褒められん」

「すいません」

江坂さんに叱られてしまった。

シヨボーン

「お前らの報告書は見させてもらった。たまたま目撃していた別の班との報告とも一致している」

「はぁーそうですか」

「・・・しかしわからん。なぜ力を隠していた？能力はともかく身体能力まで・・・その力なら同期・・・いや、全ガーディアン」

中ですらお前に匹敵する者はいない言うのに・・・何故だ？」

なぜって・・・

「今宮にも同じこといったんですけど・・・聞かれなかったし、見せろとも言われませんでしたから」

「・・・・・・お前はロシアの司令部の推薦状でココに来たのだったな？」

「はい」

「それ以前の経歴は一切わからないと資料に書いてある。以前は何をしていた？・・・貴様は何者だ？目的は何だ？」

なんかめっちゃくちや睨まれてます（ガクブル

「話せることだけ話して、適当に誤魔化しておいたら？」

そうだな、話せるところだけ話すと・・・

「俺はこの時代の人間ではありません。ここから少し未来の地球。滅びてしまった鋼の大地から来ました。俺はそこで魔物と戦う騎士というものでした。目的は世界の死を食い止めることです」

「何言っちゃてんのこの馬鹿は~~~~~!？」

え？だって聞いてきたからしゃべれる範囲で答えたのよ？

「しゃべれる範囲でかすぎんのよ~~~~~!ばかばかアホ~~~~~!

!

さっきまでの殺気立った顔とは打って変わってぽかんとしている  
 ナイスミドル江坂さん。

「それは本当なのか？」

「はい」

「世界は滅びてしまうのか？」

「はい。しかし人類は生き残ります。環境に対応できなくなつて多くの人が死にました。でも、突然変異と遺伝子操作により環境に耐えられる自分のような新人類が誕生しました。俺のいた時代には旧人類の生き残りは1人だけでした。安全の保障をしてくれるのなら、体を調べてもらつても構いません。俺のソレはあなた方とは違うと思います」

[[[...]]]

気が付くと司令室にいた者、全員が俺のほうを見ている。その中には今宮と西九条もいた。

長い沈黙。それはそうだ、人類を守るガーディアンに人類は滅びる  
 と言っているようなものだ。

「・・・わかった。君の安全と自由は私が保証する。すぐに検査してもらいたい」

「わかりました」

江坂さんはうなずくとどこかに連絡を取った。

「ではこちらだ」

/

「信じられません。彼は特殊な環境を生き残るためにまったく新しい器官を持っています。おそらくこれは摂取した有毒物質を分解するものだと思います。しかしこの時代では不必要なものなのでしょう。活動している様子がありません。血中の赤血球を見てください。このような形のは見たことありません。また、身体能力も筋肉の構成から我々のものとは違います。まるで魔物だ」

「彼は魔物なのか？」

「いえ、それはありません。念のため検査しましたが反応は見られませんでした。・・・彼の言うように新人類と言うのが正解なのでしょう・・・」

「もういいですか？」

診察台から降りながら江坂さんたちに声をかける。

「・・・ああ、君の言う通りだ。君は我々とは違うようだ」

ふつと江坂さんが笑みをこぼす。

「・・・ふふっあゝはっはっはあゝ！」

突然の大笑いに医療スタッフも俺もぽかんとしてしまった。

「君は物好きな男だな。世界を救うためにこんなところまで来て。相  
当なお人よしだよ」

「え？信じるんですか？」

まさかそんな簡単に信じてもらえると思っていなかった。

「ふふっ、だってお前は私の「なぜ力を隠すのか」という質問に「  
聞かれなかったから」と答えた。ならば聞いてみようと、私はお前  
に「何者だ」と質問したんだ。そしたらお前は「未来人」と答えた。  
あまつさえ、検査結果が物語っている。それだけで十分だ」

さすが江坂さん。見た目も中身もナイスミドルなだけあるな。

「ホント、どうなることかと思っただわよ・・・」

すまんすまん。めんどくさくなったから早めに打ち明けたかったん  
だよ。

そこにあの質問でしょ？しゃべっちゃったw

「・・・あとでお仕置きね」

ちよっ！勘弁してつかさい！

「このことは秘密にしとくべきでは？」

ドクターがそう言うってくれるが、

「今更遅いですよ。検査結果が出た時点で本部の全員に知れ渡ってるだろうし」

「ふむ、人の口に戸は立てられんか・・・」

江坂さんが少し考え、口を開く。

「パスポートは持っているか？」

「え？一応支給された物の中にありますけど・・・」

「よし、立花！ヴァチカンに飛ぶぞ！これから貴様には救世主となつてもらふ。この時代に来たのだその覚悟はあるはずだ」

「はい？」

そして俺はガーディアン総本山であるヴァチカンにとんだ。

後から聞いた話だと、瑚太郎は俺たちを追い、森に入ったところ魔

物に襲われたのか傷は塞がったものの意識不明の重体だそうだ。脳にダメージを受けているらしい。

今宮も西九条もそのことを思い悩んでいたと江坂さんから聞かされた。

まさかTerrallルートじゃないとは思わなかった。おそらく、森に入る朱音をみてそれを追い、木から落ちるところを救って怪我をしたのだろ。その後小鳥と簞のおかげで助かったのだろ。

原作開始まで後9年

/

ヴァチカンに飛んだ俺と江坂さんはなにやら偉そうな人の前にだされ、いろいろ質問された。

面倒だからこのときにオルトも紹介した。

その時、魔物使いとして疑われそうになりたり（ある意味あってる）、キレたオルトがORT化したりといろいろあった。

突然目の前に体長40メートルのスペースパイダーが現れたときの人の表情見たことあるか？

めっちゃ笑えるぜw

今は問題なく受け入れられている。

けっして、触らぬ神に祟り無し<sup>1</sup>の精神ではないと思いたい。

その後、俺たちはいろんな機関で検査を受けた。どれも同じ結果しか得られないだろう。

そうそう、千年後の世界に人類を送り込むために多くの子供たちを犠牲にした馬鹿げたプロジェクトがあった。

そう、原作キャラのルチアがいた場所だ。

ルチアはそんなプロジェクトの唯一の成功者だった。

その体は存在するだけで、千年後の世界・・・鋼の大地を再現してします。

彼女は人と触れ合うことができない。花を愛することができない。子犬と遊ぶことができない。

触れるだけで殺してしまうから。

そこで俺の出番なわけですよ。

「3年ぶりだな？元気してた？」

「ええ。そういうあなたは相変わらずむちゃくちゃしてるのね」

3年ぶりに西九条に会った。・・・というか呼びつけたのは俺だけだ。

「そついうお前はずいぶん変わったのな」

なんか表情が優しくなったな。

「・・・いつまでも沈んでいられないし、いろいろあったのよ」  
からつとした明るい表情をする。うむ。

「昔から可愛かったが、今のほうが断然可愛いぞ」  
と思ったことを素直に打ち明ける。

「ほ、ほんと!？」

「ホントホント」

なにやら頬を赤らめくねくねし始める。・・・・・・フラグ  
いつ立てた？

3年前です。

「・・・エデム後でお仕置き」

何故に!？

「あ?この子がオルトちゃん? はじめまして、西九条 灯花です。」

「・・・はじめまして。オルト・T・M・立花です」

「かわいい」 うちの静流ちゃんと同じくらいかわいいわ! あ、  
今度あわせてあげる」

そういつてオルトにくつつく西九条。

ちなみにオルト・T・M・立花のA・Mはタイプ・マーキュリーの略である。

ちなみに俺も七桜・A・E・立花になっており。A・Eはもちろんアド・エデムの略である。

#### 閑話休題

「じゃれつくのもいいが、違法施設への捜査始めるぞ西九条」

「灯花」

「・・・は？」

「灯花って呼んで私も七桜って呼ぶから」

「いや・・・」

じい——————

「うっ」

じい——————

「・・・灯花」

「うん　七桜。それじゃ、さっさと捕まえちゃましよう」

そついうと数人の部下を連れて、施設に入っっていた。

「・・・」

俺は隣から来るプレッシャーに身動きひとつ出来ずにいた。

「・・・エデム？」

「・・・はい」

「帰ったらお仕置きスペシャルだから」

なぜだ。

/

施設をあらかた潰し終えた俺は逮捕やらなんやらは灯花にまかして、ルチアがいるであろう隔離棟へやってきた。

密閉された部屋の真ん中で女の子が診察台の上に座っている。入ってきた俺を見て驚いているようだ。

「こんにちは。俺は七桜。七桜・A・E・立花」

警戒させないように静かに言う。

「来ないで！ 私に近づくとみんな死んじゃうー！」

俺には見えていたこの部屋に充満したジンが。そしてそれは部屋の中心にいる黒髪の女の子からにじみ出ている。

俺の推測は当たったようだ。千年後の世界とは俺のいた鋼の大地である。その有害物質と言えはジンしかない。

おれは部屋のジンをすべて魔力に変換していく。そして、彼女に近づきそつと頭を撫でてやる。

「大丈夫。なんたつてお兄さんは千年後から来た人だからね」

そういつて彼女の体内のジンも吸収する。枯渴したジンはしばらくは出てこないだろう。

「ホント？・・・本当に大丈夫なの？」

心配そうに見上げてくる。

「ああ。そうだお兄さんと来ないか？そうすればもう誰も殺さずにするよ」

いや、

「この言い回しは卑怯だね」

これは俺の本心ではない。俺はこの子をジンの源として見た。そん

な自分がいやになる。

「?」

不思議そうに見上げてくる。

「本心を言う。プロジェクトは中止された。君は自由だ。そして俺は俺のためにお前の力が必要だ。見返りにお前の毒は俺が消してやる。俺について来い」

そういつて手を差し伸べる。

我ながら小学5年くらいの子供にいう台詞じゃないな。

「・・・・・・・・」

しばらく考えたであろう少女は俺の手を凝視している。それに問いかける。

「どうする?」

「・・・・・・・・」

するとそつと俺の手を握り返してきた。

「よし!今日からお前はルチア・立花だ　俺のことはパパと呼ぶよ  
うに!」

「私はオルト。オルト・T・M・立花よ。ママって呼んでくれていいわよ!」

「あ、お前いたんだ。きづかn（バキッ　グッペラッ！」

いや、マジで気づかなかったんだって！ごめんなさい！や、やめt  
ブゲラッ！！

「あんたはいつもいっもくくく！」

そんなやり取りを少女は最初こそ呆然と見つめているばかりだったが、次第に涙を流しながら笑顔を浮かべるのだった。

予断であるが、お偉いさんが今回の施設閉鎖に文句を言ってきた。  
しかもルチアの身柄を寄越せとまでいつてきたので目の前で眼帯を  
外してやった。

するとあら不思議。文句言う人が誰もいなくなりましたとさ。

でめたしでめたし。

原作開始まで後6年

続ければいいな。

003メートル 自重しませんよw（後書き）

お楽しみいただけましたか？

今回は幼女ルチアが登場です。

今回はまだ書いてませんが、静流とか絡ませていきたいです。

ご意見・感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6832v/>

---

エデムとORTが行く平行世界 第2弾 ~ Rewrite 編 ~

2011年8月10日22時15分発行